

# 戦国期武家の日常使いの貿易陶磁の実像

水澤幸一

十五世紀中葉～十六世紀中葉を中心に

A Realistic Portrait Concerning the Daily Use of Trade Ceramics by Samurai Families in the Warring States Period  
with a Focus on the Mid-15th to Mid-16th Centuries

MIZUSAWA Kouichi

はじめに

①十五世紀前半の貿易陶磁器様相  
②諏訪問興行寺遺跡炭化物層出土遺物再論

③各地の十五世紀中葉～十六世紀中葉の貿易陶磁器様相  
④十五世紀中葉～十六世紀中葉の貿易陶磁器の実像  
おわりに

【論文要旨】

本稿では、戦国期城館の実年代を探るための考古学的手段として、貿易陶磁器の中でも最もサイクルの早い食膳具を中心に十五世紀中葉～十六世紀中葉の出土様相を検討し、遺跡ごとの組成を明らかにした。

まず、十五世紀前半に終焉をむかえる三遺跡をとりあげ、非常に器種が限られていたことを確認し、次いで十五世紀第三四半期の基準資料である福井県諏訪問興行寺遺跡の検討を行った。そして兵庫県宮内堀脇遺跡や京都臨川寺跡、山科本願寺跡、千葉県真里谷城跡、新潟県至徳寺遺跡等十二例と前稿で取り上げた愛媛県見近島城跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡などを加え、当該期の貿易陶磁比の変遷を示した。

その結果、十五世紀代は青磁が圧倒的比率を占めており、十五世紀中葉の青花磁の出現期から十六世紀第一四半期までの定着期は、一部の高級品が政治的最上位階層に保有されたものの貿易陶磁器の主流となるほどの流入量には達せず、日本社会にその

存在を認知させる段階に留まったと考えられる。

そして青花磁が量的に広く日本社会に浸透するには十六世紀中葉をまたねばならなかったが、その時期は白磁皿がより多くを占めることから、青花磁が貿易陶磁の中で主体を占める時期は一五七〇年代以降の天正年間以降にずれ込むことを明らかにできた。

器種としては、十六世紀以降白磁、青花磁皿が圧倒的であり、碗は青磁から青花磁へと移るが、主体的には漆器碗が用いられていたと考えられる。

なお、食膳具以外の高級品についても検討した結果、多くの製品は伝世というほどの保有期間がなく、中国で生産されたものがストレートに入ってきていたことを想定した。

【キーワード】 武家、貿易陶磁器、奢侈品、山科本願寺、青磁、青花